THE FLUTE

10月号

COVER STORY
カール＝ハインツ・シュッツ

Vol. 122
2012

定価 1,000 YEN

• SCORE •
風が吹いている
NHK ロンドンオリンピック放送
テーマソング
いきものがかり 歌
水野良樹 作曲　黒田賢一 編曲

【SERIES】

カッコ良く吹きたい!
Jazz&Pops
坂上領

大森義和流
フルートレッスン術

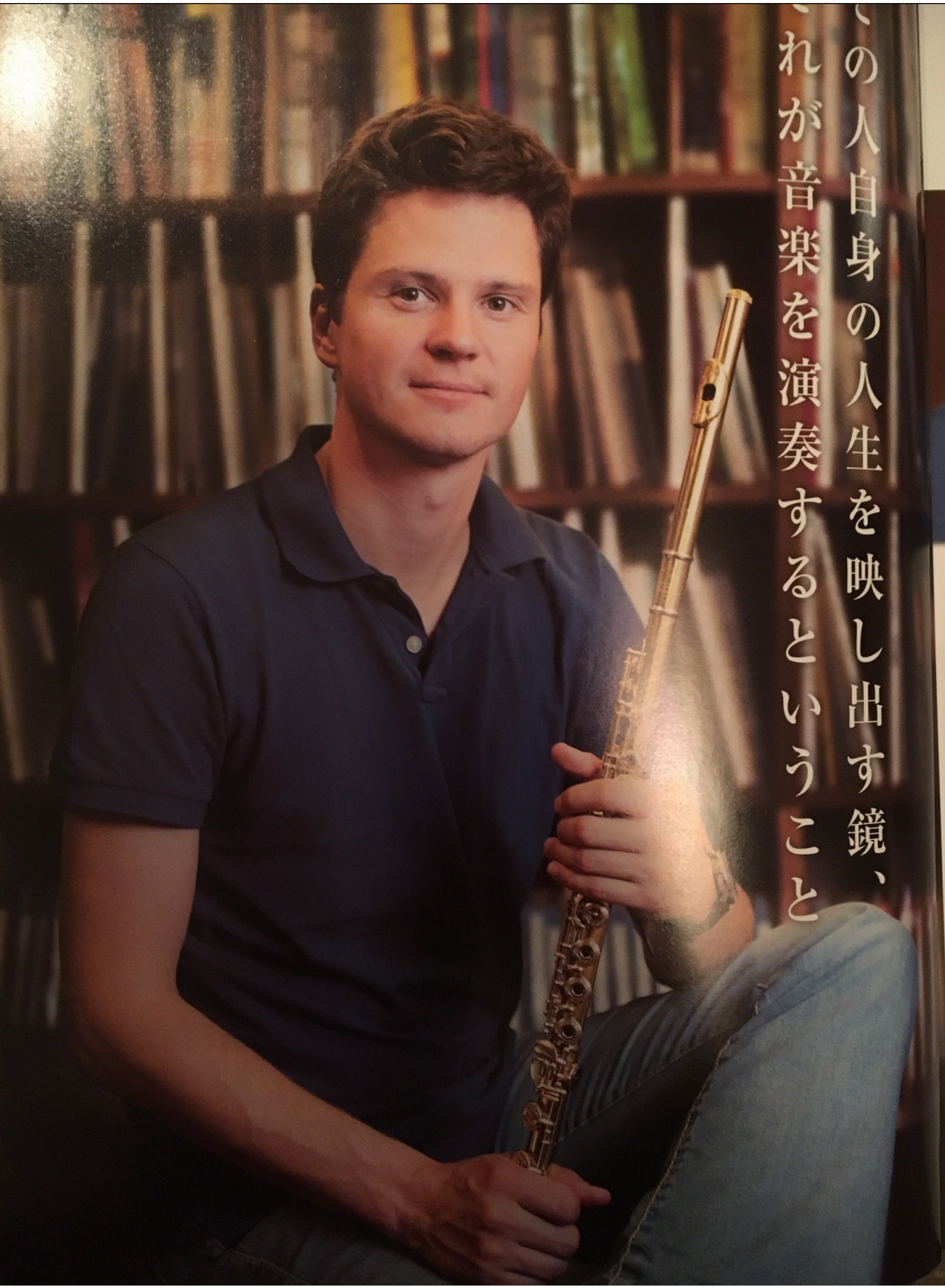
魔法の基礎練習

さかはし矢波の
つれづれ放送局

ニューヨークからの風
YUKARI

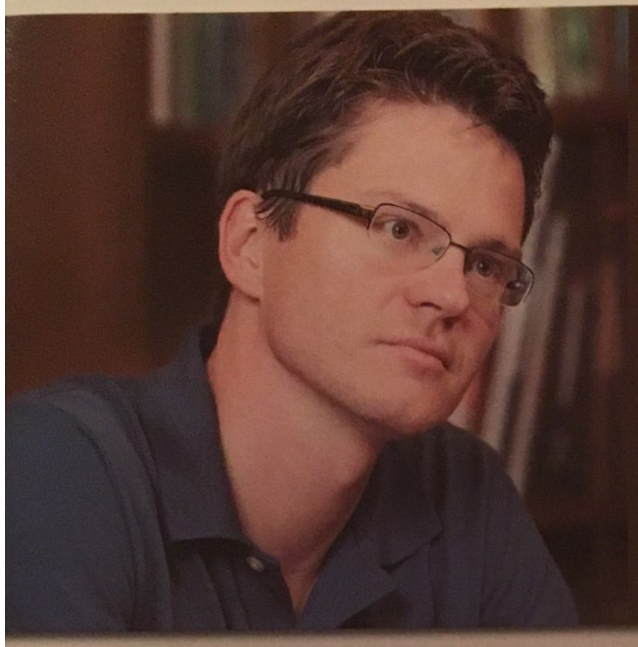
人気連載
もう怖くない! ピッコロ
—気になるプロたちの練習編— 増本竜士／山村有佳里

SPECIAL CONTENTS
Flute Life白書 第4弾
読者仲間たちのFLUTE LIFE Part2


この人自身の人生を映し出す鏡、
それが音楽を演奏するということ

昨年、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の首席奏者に就任したカール＝ハインツ・シュッツ氏。オーストリア人にとっても夢の舞台であるウィーン・フィルでのポジションを得て、オペラ、コンサートやソロで活動の可能性が広がり、環境が大きく変化したという。音楽に真摯に対峙しているシュッツ氏の初のインタビューが今回実現した。

インタビュア・翻訳：加納敬三　取材協力：村松楽器販売株式会社　写真：土居政則



Karl- Heinz Schütz

カール＝ハインツ・シュッツ

■ Profile　Karl- Heinz Schütz

ウィーン国立オペラ、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団首席奏者。ウィーン芸術大学教授。インスブルック生まれ。リヨン国立音楽院にてPh.ベルノルドに師事、またA.ニコレの指導を受ける。1998年カール・ニールセン国際コンクール1位、及び1999年クラコウ国際コンクールにて1位受賞。シュトゥットガルト・フィル首席奏者を2000年から2004年まで務める。北ドイツ放送交響楽団、スイス・ロマンド管弦楽団、バイロイト祝祭歌劇場など多数の著名オーケストラに招聘され共演をする。フルート協奏曲ソロ奏者として、プレートル、ブーレーズ、サヴァリッシュ他の多数の著名な指揮者と共演。オーケストラ・プレイヤーとしてだけではなく、ソロ・フルーティストとして、室内楽奏者として、バロックから現代曲まで幅広いレパートリーを世界各国で披露している。また、指導者として、ヨーロッパ各地、アジア、北米などで活動している。

厳格なスイスと軽やかさを持つフランスで学んで

――THE FLUTEは初めての登場ですね。最初にあなたがフルートを始めたきっかけをお話しください。

Schütz（以下 S）　11歳の時にフルートを始めました。私はオーストリアのチロル地方の出身で、ブラスバンドの伝統がありました。子どもの私にとってフルートを習うことはとても魅力的なことでした。フルートを教えてくれる先生を探したのですが、周りには見つからず市立の音楽学校へ行きました。小学校の時に才能が認められて、音楽高等中学校へ進学しましたが、14歳の時に初めて専門的なレッスンを受けました。

15か16歳の頃にはプロになろうと決めていました。当時私の先生であるエヴァ・アムスラー女史が度々オーケストラのコンサートに連れて行ってくださり、それで自分もオーケストラで演奏してみたいと思ったのです。

――シュッツさんはフィリップ・ベルノルド、オーレル・ニコレ両氏について学んでいらっしゃいますね。

S　その質問に関してはまずアムスラー女史の話からはじめなければなりません。彼女はスイス人でアンドレ・ジョネとニコレのもとで学んでいます。私の学校はスイスに近いオーストリア西端部にあり、オーストリアの小学校を卒業後は彼女によってニコレやフランスで勉強する方向づけがなされたように思います。

17、18歳の時に彼女が初めてニコレのところにレッスンに連れて行ってくれました。ニコレは午後からずっと私のためにレッスンをしてくれたのです。大変濃密なプライベートなレッスンでした。その後しばらくして私は大学入学資格試験を受け、大学はどこで今後勉強すればよいかと考えました。

オーストリアでこのまま大学に進学する選択肢もありましたが、ニコレが「絶対に君はフランスで勉強を続けるべきだ」と言ってくれたのです。それもパリではなく、リヨンのフィリップ・ベルノルドを推薦してくれました。

ニコレが直感的に私にフランスに行くべきだと言ったのは、フルートだけでなく、フランスと人々の生活についても学ぶべきで、もう一度フルートを違った言語、つまりフランス語で聴き直すことが必要だということだったのです。リヨンではフランス的なアーティキュレーションやフレージング、繊細さなど洗練された表現方法を学びました。

スイス人はすべてにおいて考えられないくらい徹底的で、アムスラーもそうでしたが、ニコレのレッスンも例に漏れず徹底的で厳しいものでした。それに対してベルノルドのところでは、フランス的な処世術というか、軽やかさというものを学びました。

時間を忘れるようなレッスン

――具体的にはどんなレッスンでしたか？

S　ニコレのレッスンは、徹底的で信じられないほど、いや理解しきれないくら

い広い地平線のようなもので、例えばバッハの場合はその哲学の話にまで及びます。ベルノルドは、彼曰く、フランス音楽は蓋を閉めた状態のピアノのようで、ドイツ音楽は、もっと蓋を開けた状態のピアノのようだと表現していました。ベルノルドは歴史的にいつも緊張状態が続いていた国境地方アルザスの出身なのでその違いがわかるのでしょう。幸運なことに私はその違いを彼のところで知り、身につけることができました。

ニコレのレッスンでは今でもよく覚えている印象深いことがあります。ある冬の冷たい雨の降る日、彼のレッスンを受けるために一人でバーゼルに行った時のことです。レッスンはとても集中したもので、終わって外に出てみるともう真っ暗で、朝早いのか夜遅いのか、今何時ごろなのかがわからなくなってしまうくらいでした。エマヌエル・バッハのニ短調のコンチェルトのレッスンでしたが、細部に渡る内容で、少し吹いては「違う」の繰り返しでやっと最後まで行くと、ニコレがタバコに火をつけて、「では最初からもう一度」という具合でした。大変厳しいレッスンで、いつ座ったかもわからないくらい体力的にも大変なものでした。

――ベルノルドのところではどうでしたか？

S　彼はレッスンにおいていつも素晴らしい創造力の持ち主でした。フランス語のニュアンスで演奏するのですが、そのニュアンスの演奏方法を的確に伝えることができ、とても複雑なことを単純にまとめた形で話してくれました。彼のお気に入りのピカソの言葉は「人はうまくいかない時に、解決方法を探すのではなく見出すのである」というものでした。また彼はとてもユーモアがあり、レッスンの間中、真面目な話も最初から最後までとても演劇的に説明してくれました。

ウィーン訛りがウィーンの音楽を生み出す

――ウィーン・フィルに入団する前に、いくつかのオーケストラで活躍されていますね。

S　まず私は4年間シュトゥットガルト・フィルに在籍して、次にウィーン・シンフォニカーに7年間、そして昨年からウィーン・フィルの首席奏者となりました。

――それぞれどんな違いがありますか？

S　ウィーン・シンフォニカーとウィーン・フィルはどちらのオーケストラは同じウィーンにあるけどちらも大きなオーケストラで、またどちらも長い伝統があります。

ウィーン・フィルは大きなレーベルと"ウィーン・フィル"という大きな名前があり、カラヤンに始まる有名な指揮者が来ますが、シンフォニカーはラファエル・フリューベック・デ・ブルゴスやジョルジュ・プレートルなどウィーン・フィルで指揮をしたことがある方が指揮者をしています。ウィーン・フィルは首席指揮者をおかず、毎回のコンサートは有名な指揮者を招きます。その指揮者の個性とウィーン・フィルの個性が同じ高みでぶつかり合うので、まるで頂上決戦のようです。

ウィーン・シンフォニカーやシュトゥットガルト・フィル、または他のオーケストラの場合もそうだと思いますが、首席指揮者がいるのでその指揮者のもとオーケ

ストラの方向性も決まります。

通常オーケストラは常に発展していますが、率いる指揮者が変わることによって、例えば創造的で哲学的な演奏から、ドイツ的な組織、構成力のある演奏へ変わってしまうことがあります。私は以前、シンフォニカーでも同じような大きな変化を経験しました。ブルゴスという指揮者は在任中、厳格ですべてをコントロールしようとしましたが、後任のブレートルはその真逆ですべてを芸術的に自由にさせました。

フィルハーモニーはこれとはまったく別で、いつも大変有名な指揮者が指揮しますが、オーケストラには自負心があり、素晴らしい響きも持っています。また、オペラで培った柔軟性があります。

――シュトゥットガルト・フィルとウィーン・フィルとではどうでしょう？

S　単純に言うと国の違いが出ていると思います。オーストリアのオーケストラは愛想がよく、社交性が重視されますが、ドイツではもっと直接的です。

わかりやすいのが、音の出だしでしょう。ドイツの場合は、指揮者が振り下ろすと、「バッ」と力強く出ますが、ウィーン風となるとこれが「ボァ」と少し柔らかくなります。我々オーストリア人は、Tを柔らかく発音しますが、オーストリア人は正しい「T」の発音ができないとドイツ人はからかいます。ドイツ人のTはもっとはっきりとしていて、発音も音楽に少なからず影響があると思います。

面白い体験があります。私が最後にシュトゥットガルトで演奏したのがワルツ『美しき青きドナウ』でした。8年後ウィーン・フィルで同じ曲を演奏した時、シュトゥットガルト・フィルではこんなに良い演奏はできないだろうと思ったのでした。なぜなら、ウィンナーワルツを演奏するには、ウィーン風の柔らかさ、つまり音の動きやリズム感が必要だからです。

――つまりウィーン訛りが必要なわけですね。

S　そのとおりです（笑）。

近年はグローバル化で大きなオーケストラの音楽や響きは似たような感じに変化してきていますが、ウィーン・フィル

Question　お使いの楽器は？

S　管体が24K、キィが14Kのムラマツフルートを吹いています。このフルートとの出会いにはちょっとしたエピソードがあります。

学生の頃は最初ムラマツを使っていましたが、ベルノルドの影響でブランネン・クーパーの14Kを吹いていました。残念なことにイタリアでその楽器は盗まれてしまい、セカンドフルートとしてヤマハの銀のフルートを持っていたのでそれをしばらく吹いていたのです。しかし、ブランネンに慣れていた私はすぐにフライブルグのベルトラムという楽器屋に行き、金のブランネンは高くて当時私は買うことができなかったので銀のブランネンを購入して吹いていたのです。コンサートではその楽器を吹いていたのですが、大変仲の良かった友だちが「君は金のフルートを買って、金のフルートを吹くべきだ」とアドバイスをくれたのです。その後、早い時期に運命の出会いとでもいうべき出来事が起こりました。

ある日私は自宅からベルトラムに電話をして、ブランネンの金のフルートを購入したいのでいつ入荷するかと尋ねたところ、3月との返事でした。ところが同じ日の午後に、パリの楽器屋のファリッジから「こちらに今あなたが興味がありそうなフルートがあるのですが」と電話があったのです！ どんなフルートかと聞くと、ムラマツの24Kのフルートでした。2日後、私はパリに飛んで、その楽器で音を2つだけ吹いたら気に入ってしまい、購入を即決しました。それが今のムラマツです。それまではとても高価なので私には買えないものだと思っていました。しかし、この楽器に呼ばれたとしか考えられない状況で、ムラマツを選択したのです。

私は、イタリアで楽器が盗まれてから、金と銀のそれぞれの長所やどちらが良いのかをずっと考えていました。これは私の考えですが、24Kのフルートは両方の長所を兼ね備えたものではないかと思っています。温かい響き、美しく柔らかい響き、銀のような響きまで演奏できます。このフルートは音色の幅が大変広いのです。

幸運なことに、この楽器は私に合っているようで、手に入れてすぐに本番で演奏できた楽器は今までありませんでした。特に銀から金に替えた時などは、急に楽器が重くなったのを感じたのですが、この楽器ではそういうことはありませんでした。幸運にも正に私にとっての正しい選択でした。不運が幸運に転化したのです。つまり楽器を盗まれたことで、自分に合う新しい楽器を見つけることができたということです。同僚が私の楽器を試したりすると、重い楽器だといいますが、私には合っているのでまったく重く感じません。

Karl-Heinz Schütz

やウィーン・シンフォニカーは他との区別がつきます。それはもちろん独特な楽器を使用していることもありますが、繊細で壊れそうな音楽だったり、その柔軟な響きによるもので、それは大変興味深いことです。

――シュッツさんにとってウィーン・フィルとはどんなオーケストラですか。

S　正直なところを言うとこのウィーン・フィルでのポストは子どもの頃からの夢でした。クラシックが好きな両親のもと、ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートやラジオ・コンサートを聴いて育った私にとって、ウィーン・フィルがアイドルのような存在になるのは自然なことでした。ですからウィーン・フィルは希望であり夢でした。それと同時に私の場合、フルート人生はオーストリアの西部からはじまり、スイス、フランス、ドイツそしてウィーンと円のように歩んできた到達点でもあります。

コンクールや入団試験をたくさん受けましたが、最初に成功したのがシュトゥットガルトでした。コンクールの準備は大変なことで、ベストの演奏をしなければいけませんが、最後は柔軟性が必要で、緊張をほぐさなければなりません。最後まで緊張して硬くなってしまうと、自分自身のすべてをブロックしてしまい、また聴衆までをブロックしてしまいかねません。ウィーン・シンフォニカーを受けた時に、その考え方でうまくいきました。

すべてを吸収した中から個性が生まれる

――ウィーン音楽院で教えていらっしゃいますが、ご自分の時と今の学生との違いはあるでしょうか。

S　私が子どもの頃の自分にとってのアイドルであった有名なフルート奏者が、今の学生たちとはすべて変わってしまったことがはっきりとわかります。私たちが勉強していたころ、ジャン＝ピエール・ランパルやジェームス・ゴールウェイはイコン（ギリシャ正教の聖画）のような存在でしたが、今の世代においてはまったく変わってしまいました。

現在バロック音楽の演奏解釈も大きく変化しています。その例としてテレマンの『幻想曲』のレッスンを学生にしていた時に、マクサンス・ラリューのことを聞いてみると、「マクサンス・ラリュー、どこかで名前は聞いたような……」というので、その演奏を聴かせてみました。フレンチスクールはとてもきれいではっきりとしたアタックをしていますが、録音を聴いた途端、彼女はこの演奏スタイルが今現在のものではないと笑い出してしまったのです。

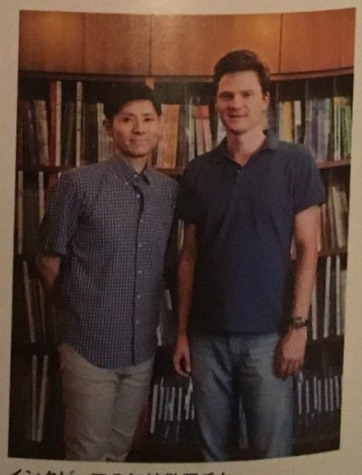
最近の学生たちはある面では昔の生徒より自分自身というものをよく自覚していますが、昔の巨匠たちに対しての尊敬をもっともってもらいたいのです。現在の録音は、技術の進歩で音一つ一つのイントネーションも訂正することができますが、ニコレの時代ではそのようなことはなく録音されていたということが、現在では失われてしまいました。個性というのは重要なことで、間違いもままあることです。

私の生徒たちにはいろんな方向に目を向けて学んで欲しいと思っています。世の中にはいろいろな方法があり、今現在はこう演奏しているけれど昔はこういうふうに演奏していたと、すべてのものを吸収した中から自分の個性というものが出てくるのです。

――最後にあなたにとってフルート、音楽とはなんでしょうか。

S　それは私の人生そのものです。もちろん、2週間の休暇があれば最初はフルートも何もしたくないと思うのですが、4、5日するとフルートを吹きたくなってしまいます。音楽は重要な空気のようなものです。音楽を演奏するということは、その人自身の人生を映し出す鏡でもあります。私にとって音楽なしでは何もはじまりません。

――ありがとうございました。



インタビュアの加納敬三氏と